

取り図に変わったたり、軍靴越しの映像で非常時を表現したりと、映像の魔術師らしい仕掛けが満載でした。また、ルバージュの語りが流麗で、俳優も顔負けするほどいい声でした。

編集部 ありがとうございます。つづいて徳永さんに、「アゴラ企画」/「こまばアゴラ劇場 Wケンジ企画」/「ザ・レジスタンス、抵抗」(こまばアゴラ劇場/作・演出)山内ケンジ/舞台監督/中西隆雄/舞台美術/杉山至/照明/西本彩/音響/藤平美保子/衣裳/正金彩/出演)山内健司、永井秀樹、川隅奈保子、端田新菜、大竹直、鄭亜美、折原アキラ、前原瑞樹、坂倉奈津子、石川彰子、串尾一輝、朝比奈竜生)をお願いします。

徳永 プロデューズ・ユニット、城山羊の会の作・演出家で、昨年の岸田國士戯曲賞を受賞した山内ケンジと、青年団のベテラン俳優である山内健司が組んだ企画です。作・演出の山内さんは本名が「健司」で完全に同姓同名ですが、俳優の山内さんに敬意を表し、数年前から自分のほうをカタカナ表記に改名しました。今回は作・演出の山内さんが俳優の山内さんを誘ったそうです。他に十一名の出演者がいましたが全員が青年団。いわば作・演出の山内が、青年団の俳優をどう使うかが見どころだったと言えるでしょう。

結果としては、濃厚なエロスと脱力系の笑いを得意とする作・演出の山内さんが、ギャグさえもきつちりと計算された平田オ

スタイルを保持するならば、字幕より演出に工夫が必要ではないかと思えます。

編集部 ドイツでご覧いただいた「WUT」(カンマーシュピール「ドイツ」/作)エルフリーデ・イエリネク/演出)ニコラス・シュテーマン)はいかがでしたか。

徳永 昨年、パリで起きたシャルリー・エブド襲撃事件をもとに、ノーベル文学賞受賞者でもある劇作家のエルフリーデ・イエリネクが戯曲を書き、ヨーロッパで大人気のニコラス・シュテーマンが演出した舞台で、ドイツのミュンヘンにある劇場カンマーシュピールで観てきました。四時間を越す大長編でしたが、チケットは連日ほぼ完売。ドイツ語上演で、英語字幕は出ますが、台詞は多くスピードが速いので、早々に観ることに集中しました。

驚いたのは、全編に鮮烈な毒とユーモアが貫かれていること。オープニングこそ真面目な朗読会風でしたが、やがて、イスラム教の神アッラーをネタにしたたり、碟にされたキリストが右往左往したりとドリフ風の混沌に。題材が題材だけに、大丈夫なのかと心配になりましたが、客席は爆笑の渦でした。戯曲がどういものかわかりませんが、少なくともイエリネクの名前の大ききなど気にかけていない演出だったと思います。

編集部 同じくカンマーシュピールでご覧になったチェルフィツチュ「部屋に流れる時間の旅」(カンマーシュピール「ドイツ」

リザさんの薫陶を受ける品行方正な青年団俳優に、下ネタの魔法をかけて新機軸を引き出しました。とは言え、不必要な露出さえも面白さに変換できたのは、俳優のものとしてのポテンシャルと、山内健司さんをはじめとする青年団の俳優に戯曲を書くことの緊張感が作・演出の山内さんにあったからではないかと思えます。作・演出の山内さんは時折り、無責任に投げ出すようなラストシーンを書いてしまうのですが、今作のラストは良いファンタジーでした。

編集部 贅沢貧乏「ハワイユー」(江東区北砂のアパート/作・演出)山田由梨/写真・ロゴ/川面健吾/音楽/阿部文平/記録映像/渡邊翔太/衣裳/山口大樹/出演)佐久間麻由、大竹このみ。

徳永 作・演出の山田由梨さんはまだ二十代半ばですが、今後を期待される才能の一人です。劇場ではない場所での公演を行うことが多く、今回も東京の下町にある古いアパートの一室を実際に借り、そこで上演されました。とても小さな部屋で、また、消滅法という趣向のシリーズの一回目でした。

その部屋で慎ましく暮らしながら、近所のハワイ湯という銭湯で働く若い女性と、同僚で、ハワイ湯の社長の息子と婚約している女性の会話劇ですが、少しずつ浮かび上ってくるのは、要領が悪く些事に奮闘している人間が、実は深く根を下ろしたくましく生活しているということ、それがだ

／作・演出)岡田利規/音・舞台美術)久門剛史/舞台監督)鈴木康郎/音響)牛川紀政/照明)大平智己/衣裳)藤谷香子/出演)青柳いづみ、安藤真理、吉田庸)をお願いします。

徳永 現時点でのチェルフィツチュの最新作で、日本では三月にKYOTO EXPERIMENTで上演され、その時も観ていますが、ヨーロッパツアーの二カ所がドイツ・ミュンヘンの劇場、カンマーシュピールで上演されていたので、二度目の観劇をしました。東日本大震災直後に「これから日本は変わる、きつと良い方向に」という思いのまま亡くなった妻の幽霊と、決して良い方向には変わっていない今の日本に生きていく夫、その夫が恋愛を始めようとしている女性のそれぞれの思いによって進んでいる話です。現代美術家の久門剛史さん製作の不思議な小道具が、音や光で作品を彩る、というより参加しています。

上演を重ねている成果としては、俳優の演技が柔らかくなり、特に妻の幽霊を演じる青柳いづみさんにそれを感じました。現地での客層は大学生が社会人数年目、いずれも知的な印象です。この限定的な状況が変わればいいなと思いつつ観ていました。

編集部 オフィスマウンテン「ドッグマン、ノーライフ」(STスポット/作・演出)振付)山縣太一/音楽)大谷能生/音響)牛川紀政/出演)振付)松村翔子、山縣太

んだん、アパートのある場所と地続きに思えてくる。規模はささやかですが、場所の必然性を強く感じさせ、深い余韻が残りました。

編集部 ベルギーでは岡崎藝術座「151 アビアシオン、サンホルム」(作・演出)美術)神里雄大/照明)笹谷亮也/音響)和田匡史/舞台監督)大久保歩/ドラマトウルク)荒尾日南子/出演)小野正彦、大村わたる、児玉磨利)をご覧いただきました。

徳永 ベルギーで年に一度開催される、エッジな作品を多く上演することで知られるクンステン・フェスティバル・デザールに岡崎藝術座が初めて招かれ、その初日を観てきました。作・演出は神里雄大さんで、神里さんの書く戯曲は、時間も場所もかなりの飛躍をしながら、それらが膨大なモノログで記されている点が最大の特徴です。また神里さんは、沖繩とペルーにルーツを持つこともあって「移動」ということに興味があるようです。

今作は、劇作家である「わたし」と、日本で左翼演劇作家として活動したのち、メキシコでメキシコ演劇の父と呼ばれるまでになった「セキサノ」が世界を旅する話で、そこに一大消費者金融会社を創設して移民に寄付を続けた「ジンナイ」も加わります。戯曲は面白いのですが、台詞が大量で演出のカードが少ないため、日本語がわかっていても理解は難しい。やはり字幕ではなおさら……という印象でした。戯曲の

一、上養佳代、中野志保実、矢野昌幸、横田僚平、藤倉めぐみ、大谷能生)。

徳永 チェルフィツチュの看板俳優として活躍していた山縣太一さんが自分のユニットを立ち上げて作・演出も手がけられ、その二作目です。前作はチェルフィツチュ初期のスタイルの影響が大きく——と言うより、自分の原点の確認としてそこを通過せざるを得なかったのだと思いますが、今回のほうが今後の山縣さんのカラーとなるものでしょう。

なんとなく家から出られなくなった夫と、代わりに生活費を稼ぐため近所のスーパーにパートに出るようになった妻、妻の周囲のスーパー従業員の、少しの会話と多くのモノログが頼りなく繰り返される動作と共に綴られます。外に出て段々ときれいになっていく妻を、自分で作った結果、あるいは見えないケージのように、出られなくなった家の一角から観察してそわそわする夫役の大谷能生(本職は評論家、ミュージシャン)が出色でした。

編集部 中野成樹+フランケンズ「演劇は今日もドラマをライブする vol.1」(東京芸術劇場シアターイースト/誤意識)構成・演出)中野成樹/美術)細川浩伸/照明)高橋英哉/音響)竹下亮/衣裳)橋麻理/舞台監督)小林英雄/演出助手)武田篤/出演)村上聡一、福田毅、竹田英司、田中佑弥、鈴鹿通儀、洪雄大、石橋志保、小泉まき、斎藤淳子、北川麗、小林美江、山田宏平、原田つむ